

## 井上円了と蓮門教

著者	西山 茂
雑誌名	井上円了研究
巻	2
ページ	95-99
発行年	1984-03-14
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00006757/">http://id.nii.ac.jp/1060/00006757/</a>



## 井上円了と蓮門教

西山 茂

一九八一年一月二日から二五日までの四日間、井上円了と蓮門教との関係を調べに九州の小倉と福岡を訪ねた。円了研究における私のテーマは「円了における民衆と宗教」である。何故、私がこのテーマを設定したかといえは、円了の宗教理解の仕方が、宗教を「智力の宗教」（仏教の聖道門）と「情感の宗教」（キリスト教や仏教の浄土門、新興宗教、その他の迷信など）とに分け、また、「信」をも「学者の信」と「愚者（一般民衆）の信」とに分け、啓蒙的な観点からであろうが、後者が前者より一段低級なものと理解しているように思えたからであった。このような彼の立場は、例えば「予固より知る、世何程開明にしたがって進むも、天下に愚民の痕跡を絶つこと能はざるを以て、情感の宗教の全く廃すべからざるを」という『真理金針（続々編）』の言葉にはっきりと示されている。また、ここに彼の宗教観と民衆観、さらには、宗教と民衆の関係観が明瞭に現われているともいえる。このような点をとらえて、「井上円了が信仰形成者としての資質に恵まれていなかった」（池田英俊「護法運動と近代主義―井上円了を中心として―池田英俊ほか編著『日本人の宗教の歩み』二九二頁・大学教育社、一九八一年）と断言する学者すらいるほどである。たしかに、彼には「信」を「智」以上の「無智の智」としてとらえる宗教者特有の反主知主義的な視点はなかったようである。しかし、「情感の宗教」が「愚夫愚婦」に対して及ぼす社会的な影響力については、これを高く評価していた。そして、こ

で取り上げる蓮門教に円了が関心を持ったのも、やはり、そうした側面からであったようである。

さて、円了が民衆教化の為に全国各地を奔走するに至った動機について、彼は以下の三つをあげている。すなわち、①蓮門教の教祖の島村ミツの成功物語、②信州の大岩の川昇りの話、③弘法大師の下層民教化の話、の三つである。そのうち、彼は、第一の蓮門教の教祖について、下記のように詳しく述べているので、少々長いが引用してみる。

「蓮門教会といふものは、諸君の知る如く、識者からは淫祠であるとてそしられ、其教ふる所は迷信であるとて斥けられて居る。私も其説く所、その教ふる所については感心して居る者ではない。けれども其開祖といはれて居る島村ミツの経歴を聞くとときには、私は感心せずには居られぬ。聞く所によれば、ミツは山口県豊浦郡の一女子で、家が貧乏であつた故、幼少豊前の小倉なる士族の家に雇はれ、下女奉公をして居た。然るに其後主家を出でて数年の間に一日偶々神の託宣とかをうけて、自分は神になつたと信じ、其所調神命を逢ふ人毎に話した。が何分にも今迄平凡の一女に過ぎなかつたため、初めは誰もミツのいふ所を信ぜぬ。信ぜぬばかりでない、多くの者は、あれは大方気狂にでもなつたのであらうといふて、少しも相手にせなかつた。けれどもミツは毫も頓着せずに、自分の思ふ所を人に語つて居たところ、そのうちに少しづつ彼女を信ずる者が出来た。ミツのいふ所全く価なき者でもない。多少尤もなところもあるといふ様になつて彼女のいふ所に耳を傾ける者ができる様になつた。そのところが丁度明治四年の頃であつて、之が蓮門教会のそもその初まりであつた。其後ミツは愈々進みて自分の信ずる所を人に伝えたものであるから、其信徒益増して、小倉に壮大なる教会堂を構へて、之を中心として、漸く勢力を地方に及ぼし、近頃では東京に於いても侮るべからざる一勢力を成す様になつた。私が先年小倉に行ったとき、其地方の銀行について尋ねたところ、彼教会が有する所の公債証書だけでも十余万円のお金額に及んで居るとのこと、猶其他の財産を加へて見積つて見ると、先ざつと二三十万円もあらうかとのことであつた。私は之を聞いて深く感じた、か

れ島村ミツは無学文盲の下女ではないか。然るに僅か三十年足らずの間に一宗教的勢力の中心となつて数百千の人民の精神を支配し、これらの者から開祖として尊敬せられ、其外に二三十万にも及ぶ財産をば有して居るとはまことに驚くべきではないか。而して其原く所を察して見れば、唯彼女が自分の信ずる所を守り、志す所に向つて一心に進み、他を顧みなかったためである。男児亦かくの如くあるべきではないか。堂々たる大丈夫、多少文字あり学識ありと自からも認め、他にも認められて居る者が、無学文盲の一下女にだも及ばぬといふは慚愧すべきの極ではないか。私は此島村ミツの話を聞いて、是非共、自分の志す所に向つて驕直に進まねばならぬことを感じた。之が私の決心を固めた原因の第一である。」（『我決心を固めたる教訓』中尾粗応編『雨水論集』三九〇～三九二頁、博文館、一九〇二年）

蓮門教の島村ミツに関する彼のこうした記述の中にも、彼の宗教観と民衆観の特徴が出ていて興味深い。では、文中の「私が先年小倉に行ったとき」とはいつたい、何時のことであつたのであろうか。蓮門教は、明治二〇年代の中葉に最盛期を迎え信者数々十万余を数えたが、その後半から万朝報等のマスコミの邪教攻撃により衰退に向かい、三十七年のミツの死去の後には分裂し、やがて消滅してしまつたユニークな法華神道系の新宗教々団であるが、上記の文章では、少なくとも蓮門教の教勢華やかなりし頃に円了が小倉に行つて同教について見聞していたことになる。そうだとすれば、彼が現地で蓮門教や島村ミツについて言及した文書資料が遺されているのではないか。そして、それが発見できれば、それを通して円了の新興宗教観（と同時に民衆と宗教との關係観）がかなり鮮明に理解できるのではないか。また、万一、それが発見出来なかつたとしても、小倉などの北九州地方における円了の巡回公演に関する資料が入手出来るのではないか。私は、ざっと、このようなことを考えつつ小倉に向かつた。

小倉では、まず、円了が明治二十五年の暮から翌年の二月にかけて山口・豊前（小倉を含む）・豊後・熊本・長崎・

佐賀・福岡の各地を巡回した折りの当時の新聞記事（円了に言及しているもの、あるいは円了が書いているもの）があるか否かを北九州市立中央図書館所蔵の「門司新報」（明治二十六年一月～昭和二年二月の現物の新聞とマイクロフィルムあり）の見出しの牽引を見ることによって確認した。その結果、明治二十七年四月一日付の第五四三号に「東京の万朝報が小倉に本部のある蓮門教とその開祖・島村ミツの醜事怪行を摘発しはじめた」旨の記事が載っている他は、同教に関する記事は勿論、円了に関する記事も、何ひとつ見出だす事が出来なかった。しかし、同図書館では、島村欣吾の「神と人の座―金蓮教始末記―」（雑誌『九州文学』第一八七号／第二〇八号連載）をはじめとする蓮門教や島村ミツに関する若干の資料を入手することができたし、同市で同教の本院の跡（堺町にある。最盛時には赤い瓦拭きの壮大な家屋敷を誇っていたので、その付近は最近までアカガワラと通称されていた。しかし、今はその跡形もない）や島村ミツの墓（広寿山という寺の参門を入った左手にある）を見学することが出来た。

次に、小倉の同図書館には「福岡日々新聞」がなかったため、福岡市の福岡県立図書館に同新聞を閲覧に行った。その結果、やはり明治二十五～二十六年の円了の九州巡回公演に関する記事はなかった。おそらく、当時はまだ円了がさほど有名でなかったために記事にしなかったものと思われる。また、彼が明治四十一年の二月に福岡県下の三郡を巡回公演して歩いた時も記事になっていない。しかし、その年の六月以後になると、円了の公演の予告や結果の紹介記事、さらには公演の要旨が紙面を賑わすようになる。こうして、六月初旬から十月初旬にかけての同紙の円了関係の記事は総て手書きかコピーで写すことが出来た。そのうちで、興味深かった事は、円了が貝原益軒を地元福岡の生んだ偉大な教育家として県の教育総会の公演で取り上げていること、斎田耕陽など地元居住の弟子たちが紙上で円了の紹介記事を書いて彼の露払いをしていること、などであった。また、この間の六月九日に福岡高女において、「修身教会の必要」と題した公演をしていることは、すでに田中菊次郎先生によって紹介されているところである。

だが、私にとっては残念なことに、こうした福岡日々新聞の円了関係の記事の中に、彼が蓮門教についてふれたものを見出だすことは出来なかった。

こうして、私の小倉行き当初の意図は果たされずに終わった。しかし、手前味噌で云わして頂くなら、そうした資料が「ない」ことが確認されたこと、さらには意図せざる結果として福岡日々新聞の円了関係の多くの記事（蓮門教とは無関係だが）を手に入れることが出来たことは、一応の「成果」と云えなくもないであろう。（一九八三年二月三日記）